

人形劇に関する認識の変容

—教育実習における児童文化財活用の取り組み—

山田 裕美子 圓入 智仁 古相 正美

Changes in Perceptions About Puppet Shows —Utilizing Cultural Properties for Children in Teaching Practice—

Yumiko Yamada Tomohito Ennyu Masami Furuso

1. はじめに

シアタースタイルの児童文化財の1つである人形劇は、保育に取り入れられた歴史はあるものの¹⁾、保育の現場において、人形を揃えることや保育者が演じるために練習をする時間を作ることが容易ではなく、ペープサートやパネルシアターを活用することが一般的となっている。しかし、子どものために保育者が人形劇を演じることは、演じる側にとっても様々な効果があることがわかってきた。保育者養成校において、人形劇を演じることによる教育的意義の研究がある。例えば米谷らは、「保育者養成大学の授業に人形劇を導入することの意味は、単に学生が保育者となった際に幼児教育・保育の現場で人形や人形劇を通して保育したり、子どもたちとかわったりするためだけではない。(中略)さまざまな気づきを得、そこから一人の人間として成長する。さらに子どもに人形劇を観せようと工夫・研鑽する学生の感受性と状況対応力、すなわち、基本的なコミュニケーション能力を高めると考える」と述べている²⁾。また、神谷は「授業における人形劇の取り組みを通して学生は、人形劇の魅力や特質、協力の大切さを学び、演技や人形制作によって表現技術・技能及び表現力を高め、将来の保育活動での人形劇の活用への見通しを持たせたことがその教育的意義として示された。尚、この教育的成果にはアクティブ・ラーニングの学習形態が大きな要因の一つとして考えられる。」と述べている³⁾。

そこで本研究では、教育実習生（以下「実習生」と表記）が幼稚園の誕生会にて保育者と共に人形劇を子どもや保護者の前で演じる機会を設け、演じる前と後とでは、実習生にどのような変化が起こるのか、また、保育を学ぶ実習生が人形劇を演じたことにより、今後この経験をどのように保育へ活かしていきたいと考えるのかについて、記述式のアンケート調査を実施した。その結果に基づいて、保育者養成において人形劇を演じることの

有用性を考察する。

2. 方法

A大学3年の実習生21名を対象とし、幼稚園教育実習期間中（平成30年6月）の6月21日に開催された誕生会に参加し、保育者と共に出し物として人形劇を演じた。まず、6月19日の保育時間終了後、実習生に誕生会でオリジナル人形劇「おおきなかぶ」を演じることで、人形劇の大まかな流れについて知らせ、練習は翌日に行うことを伝えた。また、役割分担を行った後、実習生へ人形劇に関するイメージについての回答を求めた。20日の保育終了後に人形劇の練習を行い、この日の練習を行った感想と、子どもがどのような反応をすると思うのかを予想して、アンケートへの回答を求めた。そして、6月21日に誕生会での人形劇の本番を終え、子どもや保護者の前で演じてみた感想と子どもの実際の反応はどうであったのか、アンケートへの回答を求めた。さらに、今後保育にどのように活かすかについても、回答を求めた。なお、アンケートの回答は全て自由記述とした。また、本稿で引用した回答は、いずれも原文ママである。

3. オリジナル人形劇「おおきなかぶ」について

今回の人形劇では、教育実習生全員が人形を持って演じることは人数的に難しかったため、担当を「人形を操る」「人形の声を出す」「実習生役として出演する」と振り分け、実習生全員が何らかの形で人形劇に参加できるようにした。今回のオリジナル人形劇では、絵本⁴⁾とは異なる登場人物を準備し、実習生それぞれが自由にキャラクター設定を行った。

台本はなく、保育者2名のうち1名がニャン太（猫）を演じて話を進め、1名は効果音を担当した。台詞の「誰か手伝って～」の合図でキャラクターが1人ずつ登場す

ること、かぶを抜く時には「うんとこしょ、どっこいしょ」と声を合わせて歌うこととし、台詞や動きはそれぞれ担当する実習生が考えた。登場する人形は、ニャン太、ビビ（ヘビ）、ボブ（男の子）、コン吉（きつね）、つる子（鶴）、亀爺（カメ）、コッツン（キツツキ）で、ボブ、コン吉、つる子は人形1体に対し2名で動かし、ニャン太以外の人形は舞台裏で声を担当する実習生を配置した。更に実習生役も設定し、人形ではなく実習生自らが客席から登場し、6名で台詞と動きを考えて演じることにした。人形と実習生が引っ張ったところでかぶが抜け、みんなでかぶを食べようというところで話は終わることとした⁵⁾。

4. 結果と考察

実習生は人形劇を演じる前には、表情なく保育者の説明を聞いている印象があったが、練習をしていくうちに笑顔が多く見られるようになった。人形劇を終えた後の実習生の表情はとても明るく、その後の実習期間中も一緒に演じた保育者へ挨拶をする際に笑顔を見せることが増えた。以下では、実際に実習生が回答した結果から、どのような変容があったのか、質問項目別に回答例を挙げながら考察する。

(1) 人形劇に対する客観的認識から主観的認識への変容

練習をする前に実習生に人形劇のイメージを尋ねたところ、「動かすのが難しそう」、「物語に入り込みやすい」、「子どもが楽しめるもの」など、幼い頃に観た人形劇や、テレビで観た人形劇の記憶から人形劇に対するイメージを回答するものが多くみられた。実際に演じる練習をしてみると、「思ったよりもオーバーに表現しなければならない」、「声と動きを合わせるのが難しい」、「協力することが大切」など演じる側の視点からの回答があがった。

例えば、実習生Bは人形劇について、次のように回答した。

人形劇とは、劇団の人たちが幼稚園や保育所、小学校などで行うというイメージがあります。昔話など、物語を人形劇で演じ、絵本とは異なり、より身近に見れ、感じられるお話の表し方の一つだと思います。見る側は、人形劇の動きや声などに面白さを感じ、楽しめるものだと思います。

その後、練習後に感じたこととして、次のように回答した。

練習をしてみて、単に人形を動かすだけでなく、役・キャラクターによって声色を変えたりなど工夫すべきことがたくさんあることを知りました。動か

し方一つでも、子どもたち皆に人形が見えるようにすることや動き方が重要なのだと思いました。

また、実習生Cは人形劇について、次のように回答した。

「演じる」もの。人形が話しているように、人形の動きと声をマッチさせるもの。人形を動かしている人間や声を出している人間が見る側にとって「人間」を感じない。物語の世界に入り込むことができる。

その後、演じる練習をしてみた後、次のように回答した。

他の役の人形が話している時に、どのような目線でどのような動きをさせればよいかよく考えて動かす必要があると感じた。声担当の人がどのようなセリフを言うか、常に予測して口を動かすことが難しいと感じた。頭に右手を入れて動かしているの、人形の頭を右に向かせる時に関節の問題で難しいと感じた。

これらの回答から、人形劇を演じる練習をしてみることで、実習生は人形で物語を表現することの技法を知るだけでなく、客席へ人形の感情を伝えるためにどのような台詞を言えば良いかや、どのように動かすべきなのかを、主体的に考えられるようになったことがわかる。これは、状況を把握して的確な行動を率先して行うことへと繋がり、思考力や判断力、表現力を向上させる効果が期待できると言えるだろう。

また、演じる側が楽しんでいることに着目した実習生Pは、人形劇のイメージを次のように回答した。

人形になりきって声をだしたり、動かしたりする。子どもが集中しやすく、世界観にはいりやすいイメージがある。人形の動きと言葉が合っていないと成立しない。

その後、練習をした後、次のように回答した。

練習してみて、劇をする側も楽しくて自然に笑っていると感じました。声と人形の動きを合わせる為にお互いに話し合っ決めていくことが大切だと思いました。

このように人形劇の練習を通して、演じる側も人形の動きや台詞を工夫する中で、実習生自身の笑顔を引き出すことや、コミュニケーション能力を高めることができることがわかる。

(2) 子どもの反応の予測と実際

保育現場での経験が少ない実習生が、どの程度子ども達の反応を予測できたのかについて、実際の反応と照らし合わせながら考察する。回答の中で多かったのが、予想以上に反応があったというものであった。

例えば実習生Dは子ども達の反応を「楽しそうに笑ったり、問いかけに答えたりする。一緒に声を出したり歌っ

たりする。」と予想していたが、実際は「笑いながら、問いかけに答えるなどし、楽しむ姿は想像通りだったが、想像以上にたくさん笑い声が聞こえ、楽しんでくれていた。」と回答していた。

他にも、実習生Oは次のように予想していた。

子ども達には、人形が動いて、その人形が話すので興味の塊になると思います。年長さんなどは裏の方に興味を持って私たちに「あの動物先生でしょ」など言うかもしれませんが、人形劇は集中して見てくれると思います。

しかし、実際の子どもの反応については、次のように回答した。

予想ではもう少し年長さんが言うかなと思ったけど、実際はきちんと静かに人形劇を見てくれていました。年少さんと年中さんは予想をはるかに越えるほど熱中して見てくれていました。

あるいは、実習生Qは子どもの反応を次のように予想していた。

年中児、年長児は、ニャンタとビビが出てきた瞬間に「あ、あの人形、知っているよ」と反応する。かぶが抜けず「誰か手伝って」と言うと、「自分が手伝う」と手を挙げる子どもがいる。「教生の先生だ」と言う。

しかし、実際は次のような反応であったと回答した。

実習生が登場することにより、実習生自体に注目してしまうのではないかと予想していましたが、子ども達は人形の動きや役の声に反応しており、完全に物語の中に入っているようでした。実際に子ども達の様子を見ると、実習生の方を見ている子どもはあまりおらず、人形に視線が集まっているのを感じました。また、かぶが抜けず、登場する人形が倒れてしまった時が一番反応が多かったように感じます。

これらの回答から、子どもの前で初めて人形劇をする実習生にとって、物語の内容から子ども達の反応を予測することはできていたが、子どもが人形劇に熱中する姿を具体的に予想することはできなかったと言える。しかし、子どもが人形劇の世界に引き込まれている姿を実際に体感したことで、子どもの純粋さや人形劇の魅力に気付くことができたのではないかと考える。

また、実習生Cは子どもの反応の予想について次のような回答をしていた。

子どもは、沢山の登場人物がでてくるため、とても楽しんでくれると思います。また、「うんとこしょ、どっこいしょ」は子どもたちが一緒に言って応援してくれるのではないかなと思いました。

しかし、実際の反応について、次のように具体的な様子

を回答した。

子どもの実際の反応をみて、私は思っていた以上に子どもが「かぶの抜けない」という部分で笑っていた印象が強かったです。また、子どもは人形劇に思っていたより入りこんでいて、「うんとこしょ、どっこいしょ」の部分を大きな声で言うてくれました。そして、全学年の子どもがとても一生懸命楽しんで観てくれていたように感じました。「誰か手伝ってくれないかな」と聞いた時に子どもが「幼稚園のみんなまで引っぱればぬけるよ」と言っていました。私はその言葉がとても印象的で、「手伝いたい」という優しい気持ちが伝わってきました。

この回答からは、実際に子どもの前で演じる体験を試みたことで、子どもが繰り返しのフレーズを楽しむだけでなく、人形劇を全身で楽しんでいることや、何を感じているのか、また、子どもの視点などを深く学ぶことができたことがわかる。

(3) 演じてみた感想について

それぞれの担当によって子どもの姿を客観的に見ることができたり、子どもの反応を声でしか感じることができなかつたりしたため、担当別に感想を考察していく。

1. 人形操作担当

人形を動かす担当の実習生は、出遣いであるため、子どもの様子や反応を直接見ることはできた。実習生Cの「子どもの反応を見てみて、とても楽しそうに見ていて声を出して応援してくれて、とても楽しく感じました。」という回答や、実習生Hの「子ども達は、人形に興味を持ち、最初から最後まで劇を見ていて嬉しく感じた。」という回答から、実習生は子ども達に楽しんでもらうために演じていたが、子ども達に楽しんでもらったことで逆に演じることを楽しめたことがわかる。このように人形劇は客席と演者とのコミュニケーションを楽しむ児童文化財でもあり、双方の感情を豊かにする効果があると言える。

関連して、実習生Sは次のように回答した。

人形劇は、見る側に立つことはありますが、演じる、声を出す、動きをすることは経験がなかったのでどう動いたら、子どもたちがより楽しめるようになるかをたくさん考えました。演じているときもとても楽しかったですし、子どもたちの反応を聞いていたら、この話を知っている子どもも知らない子どももとても楽しめたのではないかなと思います。また、一人や二人だけで演じるのではなく大勢で演じることができる人形劇であるので、そのキャラクターに合った動きや、声などをすることで、より子

どもたちの興味・関心を持つようになるのだろうと考えました。話しがわからなくても、そのキャラクターが動くことが面白かったり、話している声が気になったりするのだろうと思います。絵本や紙芝居とはまた違った魅力があり、子どもたちを引きつける力が人形劇にはあるのだと実感しました。

このように、実習生は人形劇を演じることで、子どもの視点に立って考えたり、演じることを楽しんだりしながら、客観的視点と主観的視点を持つことができたようである。また、楽しんでいる子どもの様子を目の当たりにしたことで、人形劇ならではの魅力に気付くことができていた。

2. 人形の声担当

舞台の裏でマイクを回しながらそれぞれの台詞を言う声担当の実習生は、子ども達の表情を見ることはできなかったものの、歓声から楽しんでいる様子が伝わっていた。そのことについて実習生Kは「楽しんでくれている様子を思い浮かべると本当に嬉しく感じた。笑い声で次の台詞が聞こえないほど、笑ってくれるとは思っていなかった。」と回答しており、人形操作担当と同じように子ども達の反応によって喜びを感じていたことがわかる。

声や台詞の工夫、さらに演じることについて実習生Nは、次のように回答した。

人形の動きを細かく再現したり、声色を雰囲気合ったものにしたりして子どもを劇にひきつけるための工夫をどんどんしていくことが大切だと実感することができた。また、予想していなかった反応もあるため、子ども達の状況に応じて臨機応変に対応していくことが重要であると思った。なにより、恥ずかしさを捨てて、子ども達が楽しめることだけを考えて、担当する人形になりきることがとても大切だと思った。そして、人形を動かす人と声を出す人が違うため、打ち合わせをしっかりすることも大切だと気づくことができた。

実習生Nは、今回の経験から子ども達の反応を予測し対応することや、演じるために必要なこととは何かを考えることができたようである。これは、保育において重要な力であり、保育者の臨機応変な対応力やクラスをまとめる話術力を育むことにも繋がっていくであろうと考える。

3. 実習生役

人形達が出揃ったところでかぶは抜けず、人形達が実習生に声を掛けて客席から出てくる実習生役は、出番までの人形劇を客席から観ることができたため、客観的視

点から感想を述べることができた。また、自らが演者となるので、それに基づく感想もあった。例えば実習生Jは、次のように回答した。

客観的に見ていると人形の手足が動き、言葉が出る劇だから、揃えて演じるのがとても難しいと思った。アドリブが効くし、顔の向きで誰に話しているのかが分かるから、子どもが劇に入り込み、発言をしやすいやり方になっていると感じた。

このことから、人形劇を演じることの難しさを感じつつも、人形で演じることの効果について気付き、子どもの様子を捉えることができていると考える。例えば実習生Tは、「私の役は特に全身子どもに見られる役だったので思っている以上に全身を大きく、声のトーンも上げて表情を作りながらするべきだと感じました。」と回答しており、表現する際に自身で工夫をしたことがわかる。

演者となった実習生Pは「人形劇の後に『先生かぶ引っ張っていたね。重かった?』と聞かれて、ちゃんと覚えているし、物語に入りこんでいることを感じました。」と回答しており、実習生Uも劇が終わった後も、「『先生最後に出てきて皆でかぶ引っ張ってたね!』と声をかけてくる子もいました。」と回答していた。このように子ども達から親しみを持って声を掛けられたことで実習生は喜びを感じると共に、子どもとの心の距離が縮まったのではないかと考える。子ども達が物語の世界を楽しんでいることに気付くことができたことは、子ども観を深めることができたとも言える。

(4) 保育への活用について

人形劇を演じた実習生が、今後この体験をどのように活用するかについて、以下の4つに分類することができた。ここではその回答例を挙げる。

1. 演じ方に関する回答

オーバーに表現をしないと伝わらなかったり、楽しい面白いと思ってもらえないので、人形劇や紙芝居を演じる際はオーバーに表現したり大きな声で伝えたり、という工夫をしていこうと思った。(声担当・実習生A)

役やその場面の感情に合わせて声を大きくしたり、高い声を出すなどの違いをつけることで、より人形の気持ち分かったことから、紙芝居やペープサートをする際の声に活かしたいと思いました。(実習生役・実習生P)

2. 日常の読み聞かせ等に関する回答

声色・トーン・間の取り方などは、絵本の読み聞かせ、ペープサート、紙芝居などの際にも重要となっ

てくるので、より子ども達の注目が集まるような工夫をしていこうと思います。(声担当・実習生B)

毎日行う絵本の読み聞かせでも声色の変化をつける、読むスピードの違い、適当な間の取り方は活かすことができると感じた。(声担当・実習生I)

3. 子どもへの対応に関する回答

子どもたちの前で役を演じるという経験が出来たため、これからも皆の前に立つ時は堂々とした姿で立とうと思います。(教生役・実習生U)

人形劇に限らず、演じたり、何か言うときには表現豊かにすることが大切だと感じたので、日々の保育に活かしていきたいと思いました。(人形役・実習生S)

4. 保育のアイデアに関する回答

子どもたちは特にパペットに注目し、よく話を聞いていると感じたため、保育に取り入れる時はお知らせや約束事など聞いてほしいことがある時に使ってみたい。(実習生役・実習生J)

繰り返しの演出の際に園児がとても良い反応をしてくれていたため、それを活かしたような、繰り返しが多い題材で園児に慣れてもらい一緒に楽しんでもらえるような遊びや活動を考えたい。(声担当・実習生K)

4. おわりに

冒頭で保育者養成校における取り組みについて述べたが、授業での取り組みではなく、今回のように短期間・短時間での人形劇を演じる体験であっても、実習生が感じたことから、教育的意義を読み取ることができた。短期間の練習ではあったが、21名の実習生が協力しアイデアを出し合って練習をしていくうちに、笑顔が溢れ、楽しい雰囲気の中でアドリブも出しやすくなり、保育者のサポートは必要不可欠ではあったものの、実際に子どもや保護者の前で演じ、楽しんでもらうことができた。

実習生にとって今回の人形劇を演じた経験は、それまでの人形劇への客観的イメージから主観的に人形劇を認識することができる機会となり、具体的に演じる際に創意工夫をしたことが学びとなり、今後の保育への活用をイメージすることもできた。人形劇は人形や小道具等が必要なため、保育に取り入れるには人形を購入する、あるいは制作する必要がある、手軽に活用することは困難である。しかし、人形劇はシアタースタイルの児童文化財の中ではパネルシアターやペープサートよりも立体的

で特別感があり、幼児の心に柔らかく寄り添い、演じる側との一体感を味わうことができるものである。観る側と演じる側の双方に効果がある人形劇は、今の時代だからこそ活用したい児童文化財であると考ええる。

注

- 1) 金城久美子「倉橋惣三と人形劇—幼稚園教育へ導入の動機と目的に関する一考察—」『幼児教育史学会 幼児教育史研究』第4号2009年 15-24頁
- 2) 米谷淳 棚橋美代子 向平知絵「保育者養成における人形劇の活用—丹下進の人形劇指導—」『京都女子大学発達教育学部研究紀要』第4号2008年 29-39頁
- 3) 神谷睦代「保育者養成における人形劇の教育的意義—授業での取り組みを通して—」新潟人間生活学会『人間生活学研究』第9号2018 69-79頁
- 4) A. トルストイ (再話) 佐藤忠良 (画) 内田莉沙子 (訳) 『おおきなかぶ』福音館書店 1966年
- 5) なお、活動に使用した人形は人形劇団「カバRuあ」より借用したものである。